振り返ってみると

水圏動物学　宗宮弘明

名古屋大と私のつきあいは、入学から就職までの16年間（学部、大学院、研究生と研究員）と、間をあけて最後の8年間（教員）の計24年となる。途中、私大（麻布大）に16年、三重大に7年在籍し、研究・教育・管理に従事してきた。麻布大では日本医大（解剖学教室）と共同研究を進めることが出来た。振り返ってみると、不思議なことに7－8年（かその倍数）の単位で移動していたことになる。

名古屋大に感謝しているのは、次の三つの点からである。

1）柔道部での裏技精神：これはどんな強い相手でも粘って、粘って、粘り抜き、最悪でも引き分けに持っていく「裏技で粘る」柔道である。これは高校時代の「立ち技中心のあっさり」柔道を払拭し、その後の生き方に大きな影響を与えてくれた。また、柔道部は民主的で、練習は厳しいが、楽しい雰囲気であった。

2）私の教養部時代には、入学式、大学祭、卒業式には、いつもたくさんの講演会が開かれていた。当時文学部哲学科の真下信一教授は講演の名手で、「哲学、概念、歴史」の意味を明快に説明し、私はそれにすっかり魅了されてしまった。この時代に生きる方向を学んだ。

3）研究の面白さと英語論文の書き方。博士2年の時に、英語論文に取り組み、当時、育種学研究室に在籍されていた若杉昇博士に論文の作り方を1週間に わたって、指導して頂いた。つまり、面白い結果を出し、筋道を立てて書き上げる。それは大変に魅力的な仕事であることを知った。

結局、名古屋大学で手に入れた、「財産」を元手に、麻布大、三重大を「回遊」し、最後に「母川」に回帰したと言うことになる。

大学院からは、魚類生物学を研究したが、麻布大（獣医生理教室）では、ラットの自律神経系に励んだ。数年後に、魚病学総論の担当になり、また魚類研究に戻ることが出来た。とにかく魚類生物学を続けていたので、三重大の魚類研究室に異動出来たと考えている。三重大では、練習船を自由に利用出来たので、再び「大好きな深海魚」を採集し、その研究を展開することが出来た。

名古屋大に移動し、2006年の暮れに偶然、「No more sea food by 2050」という論文を読み、その内容に正直驚いた。「海は広いし、深いし、まだ当分、魚類資源は安定的に確保できる」と、根拠なしに考えていたからだ。多数の関連論文を読んだ結果、カナダの資源学者が、即刻乱獲をやめ、持続可能な魚類資源管理を実施し、多くの海洋保護区の設定が必要と主張していることが判った。また、今のままだと、2050年にはほとんどの魚種が崩壊（これまでの最高の漁獲高の10%以下になる）すると危惧されている。気候変動や生物多様性の急速な衰退を考えると、いまこそ、持続可能な新しい漁業・農業のあり方を探求する時代になったと思う。進取の気勢が著しい若い研究者にそれを期待したい。